

今回は、縄文時代の後に到来した弥生時代について紹介します。

片上近辺にある弥生時代の遺跡として、弁財天山に築かれた高地性環壕集落(こうちせいかんごうしゅうらく)があります。これは山上にムラを造りそれを囲むように深い堀を巡らした遺跡のことを指し、一般的に争乱に備えた遺跡として評価されています。それでは当時の社会に何が起こっていたのでしょうか。北部九州では社会的基盤を支える稲作が急速に普及したことで、可耕地や水利の確保に端を発したムラ同士の争いが連鎖的に発生したと考えられています。これがやがて広域の地域同士の争乱に発展し、結果として“クニ”が生まれたと想定されています。ですので、北陸南西部にある当地域でも同様の事態が起こっていたのかもしれない。

この弥生時代も終わりごろ(約1,800年前)になると、弁財天の高地性環壕集落は消え、北陸地域に共通した特徴をもつ土器(生活雑器)が片上各地の山際付近で見られるようになります。片上の弥生社会が“コシ”という大きな政治的なまとまりに組み込まれたことを示すものかはわかりませんが、少なくとも平和が到来し、現在の各集落の原形となるような小さなムラが誕生したとみられます。

しかし、次の時代の変革はそこまで迫っていました。

文化課 深川義之

